

山口大学農学部・獣医学部同窓会(青山会)東京支部

深町会長退任のお知らせ&ご挨拶

深町 輝康 昭和43年卒業(V16)

関係各位のご尽力でニューズレター13号の刊行が出来、有難うございます。先日(2023/11/25)の在京山口大学農・獣医学部同窓会総会懇親会には、皆様ご多忙中のところご参加いただき有難うございました。新型コロナ感染症拡大でこの様な集合集会出现せず、4年ぶりの開催となりました。今回は前獣医学部長木曾康郎先生、また前微生物学教授(現国立感染研部長)前田健先生にご臨席賜り、前田先生からは特別講演をいただきました。

山口大学獣医学部は1944(昭和19)年、山口県獣医畜産専門学校としてスタート、1949(昭和24)年の学制改革で新制山口大学農学部獣医学科に編入され、1978年には修学期間が2年間延長され獣医学修士課程が設けられました。その後世界的にいろんな分野のグローバル化が進み、日本における獣医学教育レベルを欧米化への引き上げ気運の高まる中、山口大学と鹿児島大学は相互補完型の教員配置と施設整備を図り、共同獣医学部へ昇格しました。その間最新鋭の研究棟(iCOVER)や病理解剖施設(iPaDL)、大動物実験施設等の増設、またMRIなどの最新鋭の医療機器の導入がなされました。2018年獣医学研究科(博士課程)が出来、これから山口大学から獣医学博士が誕生します。そしてアジアでは初となる、EAVEA(欧州獣医学教育機関協会)の認証を2019年取得することが出来ました。

獣医学部同窓会“青山会”は獣医学部1回生が卒業した2018年3月、農学部同窓会から分離独立しました。“青山会”の由来は、明治維新の先駆者、柳井の海坊僧、釈月性の漢詩「將に東遊せんとして壁に題す」の最終句、「人間至る所青山あり」から、また防府の詩人、種田山頭火の「分け入っても・分け入っても青い山」から頂きました。釈月性先生は防府から京阪神へ旅立つとき、その勇躍する覚悟を詠い、又種田山頭火先生は、修業は果てしなく続く青い山と(私は)表現されているように感じます。お二人の思いの凝縮が青い山、“青山会”です。

最後になりますが、私はこの総会で在京山口大学農・獣医学部同窓会会長の任を辞し、後任に長年事務局長であった桑野昭(V21)先生が皆様の賛同を頂き就任頂きました。新会長のリーダーシップでますますこの会が発展充実することを祈念しております。有難うございました。

2023/11/25 ホテルグランドヒル市ヶ谷

桑野新会長ご挨拶

桑野 昭 昭和48年卒業(V21)

2023年11月25日の東京支部同窓会の総会において深町輝康前会長から会長を引き継ぐことで賛同が得られました桑野 昭(V21)でございます。

2009年から東京支部同窓会の事務局として運営等のお手伝いをして参りました。

事務局のメンバーと連携して今後とも時代の流れや会の成長とともに東京支部同窓会を進化させて参りたいと思っております。皆様のご支援の程どうぞよろしくお願い申し上げます。



杉 雪子 三重大学大学院医学系研究科修復再生病理学客員教授
元サウスカロライナ医科大学再生医学・細胞生物学准教授
山口大学農学部獣医学科 昭和52年卒業(V25)
山口大学大学院農学研究科獣医学専攻修士課程 昭和54年修了

私は昭和52年に山口大学農学部獣医学科を卒業し(V25)昭和54年に修士課程を修了いたしました。32年間にわたる米国滞在の後、昨年帰国いたしました。獣医師として日々活躍される皆様方が多い中で、私は基礎系の研究者としての道を歩んで参りました。今回、「私の軌跡」に寄稿の機会をいただいた事をありがたく思います。

山口大学の修士課程では木脇教授、牧田登之助教授(当時、後に農学部長)の解剖学教室で当時、組織学・細胞生物学研究の主流であった電子顕微鏡学を学ぶ機会を得ました。学部4年間、修士2年間はその後私が研究者となっていくための重要なキーポイントでした。学部卒業の時点で、将来的に何か基礎研究の道に進み研究者として生きる事ができたらと考えるようになっていました。

昭和55年(1980年)に牧田登之先生のご紹介により、電子顕微鏡で心臓発生の研究を進めておられた平光厲司教授の埼玉医科大学第二解剖学教室助手(現在の助教)となりました。埼玉医科大学では「心臓刺激伝導系発生の超微形態学的研究」を学位論文のテーマとして研究、組織学実習では学部学生の教育に携わることとなりました。ここで私は初めて心臓発生の研究に触れることになりましたが、埼玉医大への面接に向かう東武東上線の車中で、当時発刊されて間もなかった、「筋肉のなぞ」(丸山工作著、岩波新書)を読み、「これから心筋発生の研究に携わるのだ」とワクワクする気分になったことを今でもよく覚えています。

平成2年(1990年)に平光教授のお勧めもあり、その前年の東京女子医大主催の高尾シンポジウムで来日講演されたDr. Roger Markwaldが学部長を務めるウィスコンシン医科大学、細胞生物学・解剖学部に留学願いのLetterと履歴書を送ったところ、共同研究を行うDr. John Loughの研究室のPostdoctoral Fellowの席を得ることができました。初めは2年の契約でしたが、後に3年に延長されました。ところで大学のあるミルウォーキー市の空港で迎えに来てくれたDr. John Loughから聞かされたのは、丁度申請していたグラントがおりたので「Fibroblast Growth Factor (FGF)による心臓発生の誘導」というテーマの仕事に参加してほしいという事でした。さて、私は前年に私の文科省奨励研究で購入したダイヤモンドナイフを電顕の超薄切片作成用に持参しておりましたし、それまで完全に形態学の研究者で、Growth Factorそのものもよく知りませんでしたから大変驚きました。33年前のことになります。けれども、今振り返ってみますと、実はその事が私に新しい道にチャレンジする機会を与えてくれたのでした。私はそれまで12年間伝統的形態学の研究手法を学んできて、「機能と形態」という言葉も、論文を書くに機能の方は形態からの推測の域を出ない内容である事に限界を感じておりました。何かもっと動的な機能を捉える研究方法が使えないのだろうかと考えていたのです。図らずもこのFGFの仕事が私に未知の世界を開いてくれました。私はそれまで細胞培養も経験がなかったわけですから短期間に多くのことを学びました。留学する事の意義や今までとは異なる研究手法や考え方にチャレンジしていくことが研究者の成長にいかにか重要なのかという事を思い知らされました。

米国に留学してから3年後、1993年は私にとって更なる転機の年となりました。先述したDr. Markwald が学部長としてサウスカロライナ州チャールストン市にあるMedical University of South Carolina に移ることになったのです。それに際してMilwaukeeから教員・研究者さらには事務方や技官まで含めて総勢十人超が移動しましたが、私にもAssistant Professorで残ってもらいたいというofferがありました。埼玉医大と平光教授には大変申し訳なかったのですが埼玉医大助手はその年の3月末で退職させていただき、4月から正式にMedical University of South CarolinaのFacultyとなりました。

アメリカに残った理由の一つとしては日米の制度の違いが挙げられます。現在では日本も30年前とは変わってきているかと思いますが、当時日本の大学教員は助手、講師、助教授、教授があり、本質的に助教授以下は講座主任である教授の下で働く形でした。アメリカではFacultyはAssistant Professorから独立しており、自分自身の研究室を経営できます。日本では教授を通さなければ出来ない共同研究も直接交渉出来るのは嬉しいことでした。良くも悪くも自分の研究です。その代わりに、自分のグラントでラボを経営していかなければならず、自分自身の給料の一部や技術員、postdoc、大学院生の給料までそのグラントから支払う事になります。チャンスと見返りのリスク、ワクワクさせられる体験とギリギリのストレス、その全てを含めてそういう機会を与えてくれたアメリカの社会に心から感謝しています。

「人間到る処に青山有り」青山会の名称の由来の如く、私も日米の異なる場所でいろいろな体験をして参りました。若い世代の皆さんにお伝えしたいのは、まず自分がやってみたいことを見つけること、そしてその事に全霊で打ち込む事が重要なのだという事です。それぞれの人間がそれぞれに出来ることを一生懸命やる事が最終的には社会への貢献につながるのだと考えています。若いみなさんのご活躍を心からお祈りして止みません。



同窓会@ホテルグランドヒル市ヶ谷 開催のご報告

コロナ禍が徐々に明け、11月に4年ぶりの同窓会を開催しました。ご多用中お越しいただいた皆さま、どうもありがとうございました！※スナップ写真は、同窓会ホームページに掲載しております。

〈開催日〉

令和5年11月25日(土) 14:00～18:00

〈内容〉

- ・総会(司会進行:吉田) 14:00～16:00
開会の挨拶(桑野)
退任の挨拶・運営に関する説明(深町)
講演会(前田先生)
- ・懇親会(司会進行:久保田、平川) 16:00～18:00



〈講演会内容〉

演者: 山口大学客員教授 前田 健先生(国立感染症研究所獣医科学部 部長)

演題: ～獣医学の誇り! 動物由来感染症対策の立場から～

動物からヒトへ伝播する感染症(動物由来感染症)は、ヒトにおける感染症のうち大半を占めている。動物由来感染症対策には、研究機関や臨床現場の垣根を越えて、医療、獣医療や環境分野などの関係者が分野横断的に連携する「ワンヘルス・アプローチ」の取組が重要であるとの認識が世界的に高まっている。講演では獣医療ならびに演者から見た連携の取組状況として、動物由来感染症の中でも近年国内でヒトの感染が確認されている重症熱性血小板減少症候群(SFTS)および急性発熱性疾患(Yezoウイルス感染症)であるマダニ媒介性感染症に対する演者の経験を含めて紹介があった。獣医学は動物由来感染症の最前線を網羅する学問であり「ワンヘルス・アプローチ」における獣医師の役割は極めて重要である。(事務局 桑野 記)



母校便り

山口大学獣医学科 創立80周年記念事業 共同獣医学部長 度会 雅久

山口大学獣医学科は、2024(令和6)年をもちまして山口高等獣医学校の設置から創立80周年の記念すべき年を迎えます。その歴史を振り返ってみると、1944(昭和19)年1月に獣医学科の前身である山口高等獣医学校が吉敷郡小郡町に設置され、翌1945(昭和20)年3月に山口獣医畜産専門学校と改称されました。その後1948(昭和23)年に、戦後新設大学である山口大学へ農学部獣医学科として参加することになり、60年以上にわたり農学部獣医学科として多くの獣医師を輩出してきました。そして2012(平成24)年からは、その輝かしい歴史を引き継ぎつつ、全国で初めてとなる共同学部として共同獣医学部獣医学科が設置され現在に至っています。

このたび、山口大学獣医学科としての記念すべき創立80周年を迎えるにあたり、皆様と喜びを分かち合い、山口高等獣医学校から共同獣医学部へと歩んできた道を振り返り、その軌跡を明らかにすると共に、今後のさらなる前進と飛躍を期し、将来の理想に向かって躍進させることは真に意義あることと考えています。このような趣旨を踏まえて、今回、創立80周年記念事業を計画いたしました。皆様におかれましては、何とぞ本趣旨にご賛同、ご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

記念式典、記念講演会、記念祝賀会

日時: 2024(令和6)年10月26日(土) 14:30～(開始時間は予定です)

場所: かめ福オンプレイス(山口市湯田温泉4-5-2)

内容(予定): 記念式典、特別講演会、記念誌発行ほか

「山口獣医専跡の記念碑」

山口市小郡下郷ふれあい通り沿いの山口県獣医師会館入口(JR山口線周防下郷駅近く)に「山口獣医専跡 山口大学獣医学科発祥の地」と書かれた記念碑があります。この記念碑は2001年に設置されました。当時の山口県獣医師会会長、中間寛徳山口大学名誉教授のご尽力によるものです(詳細は山口県獣医師会会報第724号・令和3年9月を参照)。記念式典参加のついでに訪ねてみてはいかがでしょうか。



山口大学獣医学科創立80周年記念式典事業ホームページ
<https://www.yamaguchi-u.ac.jp/vet/80th/index.html>



猫の繁殖周期は、、、猫と光の不思議な関係

季節に関係なく繁殖可能な動物を「周年繁殖動物」といい、いぬ・牛・豚・モルモットなどです。一方日照時間に左右される動物を「季節繁殖動物」といいます。春から夏にかけて日照時間の長い時期に繁殖する動物を「長日繁殖動物」と言い、猫・馬・熊・オオカミ・狸などがいます。

どうやって判断ができるの？

日照時間に左右されるということですが、猫はどうやって光の当たる時間を判断することができるのでしょうか？実は、脳の中にある松果体という器官が大きく関わっているそうです。この松果体での光の認識により、メラトニン*1と呼ばれる物質が分泌されます。そして、このメラトニンにより、猫の繁殖はコントロールされているのです。

日照時間と発情の関係

筒井敏彦先生(日本獣医生命科学大学名誉教授)によると、猫は1日8時間以下の照明であった場合、発情はせず、1日12時間以上の照明であった場合、発情をするという調査結果を発表しました。そのため、日照時間の比較的短い9～12月は全く発情をしません。また、冬の期間雪に覆われ、日の光が少ない日本海側は発情が遅いという調査結果も出ています。

猫の受精と性周期

ネコは交尾排卵と言って、交尾後に排卵しその後複数の交尾で妊娠します。交尾相手の選択権はメス猫にあります。メス猫がオス猫を気に入らなかった場合、交尾相手として受け入れることはありません。ですから、オス猫は自分の子孫を残すために、慎重に慎重を重ねて行動します。妊娠期間は凡そ67日。不妊の場合、凡そ40日の偽妊娠を経て再度発情します。また交尾しなければ2か月位発情期間が続くと云われています。子育て(ミルク授乳)中は発情しません。オス猫はメス猫の発情がきっかけで発情するので、いつでも繁殖可能です。雌猫の発情回数は通常年2回ですが、野良猫の場合は年1回のこともあり、短毛種の場合は3回以上など、生活環境や種によってまちまちです。なお、年齢的に繁殖期のピークは2～8歳ですが、30歳で出産したという世界記録もあります。



引用:「PetsSmilenews for ネコちゃん」(<https://psnews.jp/cat/>)

「子猫の部屋」(<https://www.konekono-heya.com/index.html>)

*1 メラトニン: (https://www.tainaidokei.jp/mechanism/3_3.html)

編集:同窓会事務局

パトナー

副島裕子(旧姓:松岡) 平成10年卒業(V44)

今回は、後輩の奥野志帆さんからパトナーを受け取りました。私は病理学研究室に所属し平成10年に卒業後、2年ほど東京の動物病院に勤務した後、地元福岡に戻り結婚し、一人小さな動物病院を開業して20年になります。妻、母、院長としてどれも不十分ながらバタバタとこなしてきましたが、最近やっと自分の時間ができるようになり、子犬を育てることになりました(これまで成犬の保護犬しか飼ったことがないので)。というのも、これまでの診療の中で、ほぼ虐待に近いしつけや飼育、カミカミ犬で診察できない、飼い主すら抱っこできない犬などを目にしてきました。もっと犬も人も楽しく過ごせれるように、力になれないかと思い、縁の深い山口県の保護団体より引き取った愛犬「まう」とともに今年からドッグトレーナーの勉強を始め、子供も大人も犬猫の飼い方、暮らし方を学べ、楽しく過ごせる施設をつくるという夢に向かって頑張っています。人生まだまだこれからです！

次のパトナーは大林さん(旧姓 安達)にお願いしました。



メール配信にご協力をお願いいたします！
皆様のメールアドレスを事務局まで。
BCC配信ですのでアドレスは公開されません。
また、同窓会ホームページからご登録できます。
<https://yamaguchiagrivet.wixsite.com/tokyo>

会長 桑野 昭(V21,S48 卒):kuwa5ayt@green.ocn.ne.jp
事務局 久保田 徹(C2,S47卒):tkubota39@m7.gyao.ne.jp
吉田 恵子(V48,H14卒):keicho@nth.biglobe.ne.jp
平川 由佳(V53,H19卒):yspiyo@yahoo.co.jp

事務局メンバー募集中です！
少しでもお手伝いできる方大歓迎です。

編集後記

皆さまいかがお過ごしでしょうか。昨年11月25日に、ホテルグランドヒル市ヶ谷において、講演会および懇親会が開催され、私も初めて参加させていただき、懇親会の司会進行を務めさせていただきました。貴重な機会をいただき、どうもありがとうございました。今年は寒暖差の激しい冬ですね。同窓生の皆さま、どうかお体を大切に新たな年をお過ごしください。(事務局 平川)